

【結語】極端な偏食と紫外線遮断に起因したビタミンD欠乏性骨軟化症の1例を経験した。低Ca血症を評価する為にはAlb, P, Mg, VitaminDも合わせて確認する必要がある。

## 6 当院救急外来を受診した低血糖患者の検討

北澤 勝・横川かおり・八幡 和明

長岡中央総合病院 糖尿病センター

当院救急外来を一年間に受診した低血糖患者は37名であった。糖尿病患者29名で1型糖尿病が10名、2型糖尿病が19名、その他の糖尿病が2例であった。7名が入院し高齢、腎機能低下、SU剤内服患者で入院が多い傾向があった。非糖尿病患者が8名おり、4名がダンピング症候群による低血糖あった。他の4名は神経性食思不振症、がんの末期など低栄養を基礎とした重症の低血糖であり、2名が入院後一日以内に死亡し、2名が数ヶ月後に死亡した。

また、2014年4月1日より救急救命士の業務が拡大し、意識障害患者への血糖値の測定と低血糖患者へのブドウ糖の投与が可能となった。搬送先の選定や低血糖患者の予後の改善が期待される。当院では一年間で16例がブドウ糖の投与を受け救急外来を受診した。救急隊到着時JCS2桁13名、3桁が11名であった、受診時にはそれぞれ6名、4名に減少していた。有効性については今後更なる検討が必要である。

## 7 メトホルミンで妊娠しえた肥満不妊女性症例

三ツ間友里恵・鈴木 克典

済生会新潟第二病院 代謝・内分泌内科

【背景】不妊の原因として肥満に伴うインスリン抵抗性が関与することが指摘されており、その一つに多のう胞性卵巣症候群(PCOS)があげられる。インスリン抵抗性改善薬の排卵誘発効果が注目されているが、その有効性は明らかではない。

【症例1】39歳女性、PCOS。10年前の不妊治療では妊娠しなかった。クロミフェン療法(CC)にメトホルミン(MET)を併用し、8ヶ月後妊娠し、出産した。

【症例2】40歳女性、PCOS。CCを開始したが無効のためゴナドトロピン療法へ変更し、MET開始した。AIHを併用し、MET開始10ヶ月後妊娠し、出産した。

【症例3】30歳女性、PCOS。CCにMETを併用し、無効のためゴナドトロピン療法へ変更、MET開始後12ヶ月で妊娠、出産した。

【考察】PCOSの原因は明らかではないが、一つにインスリン抵抗性による高インスリン血症に伴うアンドロゲンの高値が考えられており、METはインスリン抵抗性を改善して性周期を正常化し、排卵に至ると考えられる。

【結語】インスリン抵抗性を伴うPCOSに対して不妊治療の補助としてMETが有効であるかもしれない。

## 8 Cabergoline 導入後の Giant Prolactinoma の治療成績

岡田 正康・米岡有一郎・大野 秀子  
藤井 幸彦

新潟大学脳研究所脳神経外科学分野

最大径で40mm以上の下垂体腺腫はGiantと定義される。こうしたGiant Prolactinoma (PRLoma)にも当科ではCabergoline (CAB)を初期治療に用いてきた。そこでCABのGiant PRLomaの治療成績の分析に、2014年度に当科通院中のPRLoma患者108名から初回治療にCABを用いた8名を解析した。発症年齢は平均56.5歳、男女比5:3、腫瘍最大径は平均51.8mm、追跡期間中央値は74.5ヶ月、CAB最大投与量中央値は0.75mg/週(0.25-14mg/週)であった。CABの効果は、血清PRL正常化率が37.5%で、50%以上の腫瘍縮小率を示した割合が62.5%だが、1例のみ腫瘍が再増大し、放射線療法を行った。髄液漏や下垂体卒中等の合併症、視機能悪化、新たな

下垂体機能低下は認めなかった。Giant PRLoma に対しても CAB は安全な治療と言える。

## 9 Down 症候群に合併した下垂体機能低下症の 1 例

田村 哲郎・富川 勝・三橋 大樹  
澁谷 航平

県立中央病院 脳神経外科

下垂体機能低下と意識障害を来した患者の診断は容易ではない。特に元々十分な病歴や症状を本人から聴取できない場合には困難である。今回我々は稀な胚腫を合併した Down 症候群の患者を経験したので報告する。

患者は 18 歳，男性，満期正常分娩で出生したが，特徴的顔貌から Down 症を疑われ，染色体検査から診断された。3 歳で停留精巣の手術を受けた。高等部に進学後 3L/日程度の多飲がみられ，入院 6 ヶ月前から時々一過性の意識消失が見られ，2 ヶ月前から食欲低下し体重減少。今回発熱，意識障害，脱水を来して緊急入院となった。入院時血清 Na 159 で輸液するも安定せず 2 週間して内分泌検査を行った所 TSH < 0.02, FT3 3.60, FT4 0.92, LH/FSH < 0.1, ACTH 12.2, Cortisol 2.5 だった。頭部 CT で第 3 脳室壁と右側脳室前角に高吸収域あり，水頭症を伴っていたため当科に転科。MRI では視床下部を中心に右前角，第 4 脳室壁に造影病変が示現された。DDAVP と hydrocortisone で電解質は正常化し，開頭術で下垂体柄を生検して胚腫と診断できた。全脳全脊髄照射を行い CR になったが，甲状腺機能低下になった。

Down 症候群の新生物としては白血病が最多，次いで脳腫瘍が多く，その中では胚細胞性腫瘍が多い。その理由は症例が少ないこともあって不明である。発見が遅れ，精神機能低下のために診断/治療に難渋しやすいが，適切な治療ができれば良好な予後が期待できる。

## 10 成長ホルモン治療中に糖尿病性ケトアシドーシスを発症したブラダーウィリ症候群の 1 例

佐藤 英利・小川 洋平・長崎 啓祐  
齋藤 昭彦

新潟大学医歯学総合病院 小児科

ブラダーウィリ症候群（以下 PWS）への成長ホルモン（以下 GH）治療により患者の QOL は大幅に改善した。しかし，PWS は本来糖尿病発症のリスクが高く，GH 治療はインスリン抵抗性を増大させる可能性がある。

症例は 8 歳，男児。乳児期に PWS と診断され 2 歳から低身長に対し GH 治療が開始された。経過中，肥満度は 77% に達したが，0.245 mg/kg/H の投与量が遵守されていた。閉塞性呼吸障害により一時 GH 治療は中断したが，アデノイド摘除術後に GH 治療は再開された。再開後 7 ヶ月で約 12 kg の体重減少があったが定期的な検査は行われず，当院紹介時は BG 566 mg/dl, pH7.169, BE - 17.8, HbA1c16.9% と糖尿病性ケトアシドーシスの状態であった。PWS に対する GH 治療は根本的治療ではなく，あくまでオプションであることを認識し，合併症を回避するため適正な管理が必要である。

## 11 新潟県内の各地域における小児生活習慣病予防健診の実態

今井忠美子  
新潟県臨床検査センター協議会  
ワーキンググループ委員

柏崎メジカルセンター

【はじめに】社会環境や生活様式の変化から生活習慣病が問題になっているが，小児の場合の本予防健診は標準化に至っていない。

【目的】より良い小児生活習慣病予防健診のあり方を検討するため実態調査を行った。

【対象・方法】県内全 30 市町村教育委員会にアンケート調査を実施。内容は，健診の有無・対象・委託先・委託内容・項目・事後指導などである。